

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00125

研究課題名（和文）気候変動の時代における環境美学

研究課題名（英文）Environmental Aesthetics in the Age of Climate Change

研究代表者

伊東 多佳子（Itoh, Takako）

富山大学・学術研究部芸術文化学系・准教授

研究者番号：00300111

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、21世紀の気候変動時代における環境美学の課題と意義を明らかにすることを目的とする。人間活動による環境破壊が急速に加速する中で、環境美学は変容する自然環境に対してどのような問題提起を説得的に行うことができるのか。本研究では、現在の環境美学や環境倫理学の研究動向を踏まえて、気候変動をめぐる新たな環境美学を提示するだけでなく、環境芸術が気候変動をめぐる諸問題に直接的に取り組むことができる具体的な事例を実践的に提示した。その成果は、2本の英文論文や環境芸術に関するテキストを含む論文として発表されただけでなく、環境芸術作品のギャラリー展示という形で顕在化し、研究の実践的な応用が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は気候変動の時代における自然環境を論じるための新たな環境美学の構築を目的とする。この新たな環境美学は、これまでの環境美学が環境保護論と連動しながら、守るべき自然環境を中心に論じていたのに対し、そこでは論じられなかった、人間に襲いかかる気候変動による「異質なもの」としての自然環境を扱う。そのために、気候危機に直接立ち向かう環境芸術の試みを参照し、分析するが、これにより、明確な定義がなされないまま議論されてきた「自然」あるいは「環境」および「芸術」の概念を明らかにしながら、環境芸術の倫理的価値を探りつつ、環境正義の問題にも踏み込む新たな環境美学が可能になる。ここに本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to identify the challenges and significance of environmental aesthetics in the 21st-century era of climate change. In the context of rapidly accelerating environmental degradation caused by human activities, what problematic issues can environmental aesthetics persuasively address about the transforming natural environment? This study not only presents a new environmental aesthetics on climate change in light of current research trends in environmental aesthetics and environmental ethics but also provides tangible examples of how environmental art can directly address the various issues surrounding climate change in practice. The results were not just presented in the form of papers, including two English papers and texts on environmental art, but also manifested in a gallery exhibition of environmental artworks, demonstrating the practical application of the research.

研究分野：環境美学

キーワード：環境美学 美学 芸術哲学 環境芸術 気候変動 アースワーク

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初は、20 世紀後半に生じた環境美学の重要性が認識されながらも、国内の研究は少なかった。英米ではバーリアントの「関与の美学」やカールソンによる「科学的知識に基づく自然を扱う美学」、独ではベームによる「雰囲気の美学」などの研究が代表的であったが、既存の自然美学の図式を排除し、主観性を極端に嫌うあまりに「環境」概念の外延を日常のあらゆるものに広げることで、具体的な美的経験を無効化する傾向や、自然観照の正当性の根拠を科学に求める無理も生じていた。

本研究により目指される環境美学は、環境概念を拡大し日常へと考察対象を広げる環境美学を本来の自然環境の美学へと引き戻し、現代の多様な環境芸術の美学的な分析をもとに、芸術形式の中での「自然の美的経験」を検討することによって、自然と芸術の交叉および相互浸透の実情を明らかにしながら、従来の伝統的な自然概念とは異なる現代の自然環境の定義を新たな環境美学の中で試みるものである。それは自然環境の悪化の中で、いままさに最重要課題となった人間と自然との新たな関係を模索するための指針となる自然哲学として構想される。これは同時に芸術の価値と環境の意味を問い直すものとなる。

2. 研究の目的

本研究は、急激に加速する人間の活動による気候変動の時代における自然環境を論じるための新たな環境美学を構築することを目的としている。これまでの環境美学は、環境保護論と連動しながら、守るべきものとしての自然環境を中心に論じていた。それに対しこの新たな環境美学は、これまでの環境美学が論じていなかった「異質なもの」として人間に出会い、ときに人間に襲いかかる気候変動による自然環境をも扱うものとなる。そのために、気候変動とそれがもたらす生物の多様性の危機に直接立ち向かう環境芸術の試みを参照し、分析することで、明確な定義がなされないまま議論されてきた「自然」あるいは「環境」および「芸術」の概念を明らかにしながら、環境芸術の倫理的価値を探りつつ、環境正義の問題にも踏み込む新たな環境美学を構築する。

3. 研究の方法

本研究は、気候変動の時代の自然環境を論じることのできる環境美学の構築を目的としている。そのための方法として、環境芸術の実証研究 英米の環境芸術の実地野外調査により個別の環境芸術作品を美学的に分析し記述する。現代の自然環境の理解と環境正義に関する理論研究による環境美学の構築 現代の複雑な自然環境について環境倫理学や環境哲学による環境をめぐる最新の議論を検討することで、そこに語られる自然概念を精査し、環境問題の現状に照らして考察する。合わせて、現在様々に行われている環境美学の試みの検討と分析を文献資料により行う。この2本の柱に沿って研究を行い、現代の複雑な自然環境を前提とした現実的で具体的かつ説得力のある環境美学を構築する。この新たな環境美学のもとで、最初期のアースワークの現在から、生態系を回復させ、環境保護批評や社会実践を行う最新のエコ芸術に至る環境芸術の調査と分析を行い、倫理的観点から環境芸術の環境美学的な評価を試みる。

4. 研究成果

新型コロナウイルスの世界的な蔓延の影響で、研究の二本柱のうちの環境芸術の実証研究が実施できない状況が3年続いたが、研究を一年延長した最終年度(2023年)にようやく渡航制限が解除され、英国での約1ヶ月にわたる環境芸術の実地野外調査が行うことができた。この調査により、気候変動に直接立ち向かう最新の環境芸術の実際に触れ、分析することが可能になった。もう一本の柱である、現代の自然環境と環境正義に関する理論研究による環境美学の構築に関しては、着実に研究を進め、2020年には、「急速に加速する人間の活動による気候変動の時代における芸術と環境美学」を『シェリング年報』に発表し、「環境美学」の項目、「環境美学 自然や環境をそれ自体として観照することは可能か」を『美学の事典』(丸善出版)で担当した。2021年には英語論文“Debating Ethical Issues Surrounding Environmental Art: On “Is Environmental Art an Aesthetic Affront to Nature?”を雑誌 *Aesthetics* に発表した。2022年には、環境芸術作家、榎原泰介と片山初音による長野県の山荘での展覧会『都会化された荒野で』(5月14、15、20、21日)における作品解説と自然環境に関する論考「自然・風景・環境をめぐる思索のために 「都会化された荒野で」に寄せて」をカタログ『都会化された荒野で』に発表した。さらに、日本学会会議シンポジウム「芸術としての風土」(11月26-27日、於：京都大学国際科学イノベーション棟シンポジウムホール)において、「気候変動の時代における芸術と環境美学」と題した講演を行なった。

2023年には研究の総まとめとなる英語論文“Environmental Art and Environmental Aesthetics in the Age of the Climate Change”を *Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics* に発表した。また、研究の実践的な試みとして、英国での実地野外調査に基づいた環境芸術の展覧会、片山初音「Lake/Hole」展（11月24日-12月22日、於：富山大学芸術文化図書館ギャラリーキューブ）を企画、キュレーションし、カタログ『Hatsune Katayama Lake/Hole』を発行した。

これらの具体的な成果物によって示されるように、本研究によって新たな環境美学を構築するために、気候危機に直接立ち向かう環境芸術の試みが参照され、分析される。また、現代の複雑な自然環境について環境倫理学や環境哲学による環境をめぐる最新の議論が検討されることで、そこに語られる自然概念が精査され、環境問題の現状に照らして考察されるが、これにより、明確な定義がなされないまま議論されてきた「自然」あるいは「環境」および「芸術」の概念を明らかにしながら、環境芸術の倫理的価値を探りつつ、環境正義の問題にも踏み込む新たな環境美学が可能になる。ここに本研究の学術的意義がある。

自然環境の美的経験について考察する環境美学において、気候変動という事態はどのように捉えられるのか。あるいは自然環境の観照は変わるのか。気候変動が私たちの知っている世界の姿を大きく作り変えつつある現在の状況の中で、私たちを取り巻く自然環境の美的経験も変化せざるを得ない。地球規模の気候変動をとともう地球温暖化の原因と結果は空間を越えて多くの異なる場所、たとえば遠く離れたところでの旱魃や海面上昇、大規模な種の絶滅とともに、身近な地域での巨大化する台風やハリケーン、頻発する洪水などの異常気象を引き起こす。地球規模の大きな変化だけでなく、ローカルな変化も同時に起きている。気候変動がどこか遠い土地の出来事ではなく、私たちの住む場所に迫ってきているという事態が、この深刻さを理解するための別の思考のモデルを必要としている。だからこそ、本研究によって構築が試みられた新たな環境美学がそのためのモデルとなるように、今後も研究を続けていかなければならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 ITOH Takako	4. 巻 No.25
2. 論文標題 Debating Ethical Issues Surrounding Environmental Art:On "Is Environmental Art an Aesthetic Affront to Nature?"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Aesthetics	6. 最初と最後の頁 50-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊東 多佳子	4. 巻 28
2. 論文標題 急激に加速する人間の活動による気候変動の時代における芸術と環境美学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 13～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32297/schellingjahrbuch.28.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takako Itoh	4. 巻 47
2. 論文標題 Environmental Art and Environmental Aesthetics in the Age of the Climate Change	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002007605	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊東多佳子
2. 発表標題 気候変動の時代における芸術と環境美学
3. 学会等名 日本学術会議シンポジウム「芸術としての風土」（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

公開シンポジウム「芸術としての風土」 https://www.scj.go.jp/ja/event/2022/331-s-1126-27.html

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------